

なか た こう へい

中田幸平と児童遊戯

平塚市岡崎在住の子ども民俗研究家中田幸平は大正15年（1926）2月10日巴波川（うずまがわ）の舟運により商都として栄えた「蔵の街」栃木市に生まれた。栃木市は『路傍の石』で有名な作家山本有三の生誕の地でもある。家業は足袋製造の「中田足袋店」であり、お得意さんは近在の農家であった。

幼少の頃文久元年（1861）生まれの祖父がよく、「石なげ合戦」「穴一」「十六むさし」など江戸時代の子どもの遊びを語り、やってみせてくれた。また母は夜なべをしながら子ども達に「落ちぶれた大店のなれのはて」「子殺し」「雨月物語に登場する大中寺」など昔話を面白く時には恐ろしく話してくれた。幼いながら人間の因果応報を信じていた幸平は、必ずその話の現場を訪ね納得するまで調べた。

この頃、母の実家にお使いに行った時、祖父が大事にしていた盆栽の枝を折り、こっぴどく怒られ泣きやまずにいると祖父から「泣き虫はうちにはいらん」と追い出され泣き泣き帰る時、祖母が黒飴「鉄砲玉」をおひねりに渡してくれた。その鉄砲玉のほろ苦く頭の芯まで突き抜ける甘さが忘れられず、後年福島県柳津町、塩川町にその飴を求め旅をした。このことが平成12年（2000）NHKの「小さな旅」で取り上げられた。幸平は小学校6年の時、近所の親友の金物屋にある鞘が真鍮の「肥後守ナイフ」がほしくてたまらなかった。普通3〜4銭で買えるものがこれは12銭もする。おじさんに負けてくれといくら頼んでもだめだった。仕方なく懐炉灰を袋に詰める仕事で100枚入ると1銭くれる賃働きで10銭稼ぎ、なんとか10銭に負けてもらった。戦後金物屋の親友は特攻隊から帰り肺結核となり、死の枕もとで幸平に「あの時お前が真剣に欲しがっていたので、実は負けた2銭は親父に俺が払った」と懐かしむような目で語ったという。幸平はこの「肥後守ナイフ」で野山に挑み野山を友とすることができた。幸平は常に「昔の子は自然を体で理解し、今の子は図鑑で理解する」と語っている。

戦争に入ると「中田足袋店」は軍服を造る軍需工場となり、家業を手伝ううち元来絵心があり器用な幸平はミシンも踏め服も作れるようになっていた。しかし絵を描きたい、文章を書きたい、演劇をしたいという思いは日増しに昂り、戦争が終わると矢も盾もたまず竹行李を担ぎ電車で飛び乗り、戦災で焼け野原の浅草駅に立った。送られて来た布団の中に母からの封筒があり、いつでも帰っておいでと帰りの汽車賃が入っていた。知人の紹介で新協劇団（現在の東京芸術座）に入りコスチュームのデザインと製作を担当した。その後女優菅井きんの紹介で俳優座に入り、コスチュームプレイの仕事を担当し、「フィガロの結婚」をはじめ数々のドラマのコスチュームを手懸けた。昭和30年（1955）すぎ桑沢デザイン研究所講師となり、ステージコスチュームデザイナーとしてやがて独立した。昭和60年（1985）にはNHK大河ドラマ「春の波濤」の風俗考証を担当している。

仕事のかたわら文芸評論家尾崎秀樹主宰の「大衆文学研究会」に入り、幸平は主として『少年倶楽部』『譚海（たんかい）』など子どもの大衆文学を研究していた。ある時講談社で各社の編集長との座談会の中で昔の子どもの遊びの話がでた。皆知っているものと思い「穴一」など江戸時代の子どもの遊びを次々と話すと、皆びっくりしてなぜそんな遊びを知っているのかと聞かれた。祖父に教えてもらったと話すと貴重なことだから本にしたらどうかと云われた。それが昭和45年（1970）6月社会思想社から初めて発刊した『日本の児童遊戯』である。昔から伝わる「ペー独楽」「ビー玉」など数々の遊びについて、その遊びの発祥から発展過程まで詳細に解説している。読めばその遊び方がわかる本であり、そのような本は今までなく研究家にとって大変貴重な文献となっている。その後『野の玩具』（1974中央公論社）、『野の民俗』（1980社会思想社）『くさばなのあそび』（1981ポプラ社）、『自然と子どもの博物誌』（1981岳書房）、『しんぶんのようふく』（1981ポプラ社）『児童劇の衣裳をつくる』（1989大月書店）最近では平成13年（2001）に『昭和子ども歳事記』を八坂書房より発刊している。幸平はこの他多くの著述をしており日本ペンクラブの会員でもある。またNHKの「たけしくん はーい」の昭和30年代の風俗考証などを行っている。

平成2年（1990）伊豆の伊東より平塚に移り住む。平成3年（1991）10月2,250点におよぶ子どものおもちゃと郷土玩具を平塚市博物館に寄贈した。翌年の7月21日〜8月30日まで市制60周年記念「夏期特別展 おもちゃとあそび—平塚市博物館所蔵 中田コレクション—」が開催された。

幸平は若い時「子どものあそびなど研究して何になるのか」と云われたこともあったが、今はここから自分の生涯の仕事としてこの事に取り組んだことに誇りと喜びを感じているという。人間形成に子どものあそびは不可欠であり、そのあそびの世界が瘦せ細っていくことに強い危機感を持っている。子どもは自然の中であそび、視・聴・嗅・味・触の五つの感覚の美意識を学び、子ども同士の遊びの中で勝ったうれしさ、負けたくやしさを、作る喜びを知り、失敗を糧とし、闘争心、我慢、思いやる心を養い成長して行く。それらのあそびが親から子へ、年長者から年少者へ伝承されてきた。失敗経験のない過保護に育った子は大人になって失敗を受けとめられず逆上してしまう。子どもが木、紙、草などに働きかけて、自分の知恵で作るおもちゃは尊い。今、まずできることは、親が小さな時おもちゃを作って遊んだ遊びを子どもと一緒に遊ぶことだという。



中田幸平



最近出版された
『昭和子ども歳事記』



手作りの刀でチャンバラ
作画 中田幸平